

〈「のに」文〉の諸相

——特に後件情意文をめぐって——

原 田 登 美

1. はじめに

前件と後件が接続助詞「のに」で結ばれた文を〈「のに」文〉と言う時、〈「のに」文〉には次のような意味構造上の特徴がある。

- 1) 状況依存文である
- 2) 話者の前提とする論理意識の上に成立する
- 3) 前件と後件には因果関係があり、後件は、前件を根拠とする結果事実を表す
- 4) 前件と後件の内容のズレが意外感として言外に表出する

また、〈「のに」文〉には、A〈完結「のに文」〉とB〈文末「のに文」〉の二つの用法がある。

A. 〈完結「のに文」〉とは、前件と後件の文が全うして、文が最後まで終了し完結している、次のような文である。

- (1) 「ほかの歯はみんないいのに、この歯だけがやられたのよ」(盲目のピアニスト)
- (2) 「これまでこんなことを考えたことはなかったのに自分の生き方はなんだろうと、ふと考えてしまったんです。」(美味しんぼ)
- (3) 「私もよ。あなたのことを大切に思ってるのに、怒りっぽくなって、わがままになって。ごめんね」(思い出にかわるまで)

〈完結「のに文」〉は、上に例として挙げた(1)～(3)のように、後件に結果事実を述べる文が後続するのが一般的である。しかし、時として次の(4)～(6)のように、

- (4) 「私、一生懸命してるのに、ひどいわ！あなたがこんな乱暴で残酷な人だなんて！」(美味しんぼ)

- (5) 「あの人は将来は重役間違いなしって言われていたのに……もう駄目！」(盲目のピアニスト)

- (6) 「もっと長く生きられたのに、残念なことをしました。」(朝日新聞)

などと、後件に話者の心情を写す述語文が後続することがある。

本稿においては、(4)～(6)のような〈「のに文」〉を、〈「のに」の後件情意文〉と呼び、〈「のに」文〉の意味構造の特徴と従属節と主節の切れという点から注目する。従属節と主節の間の切れについては今後「〈「のに」文〉の切れ」と仮称して説明する。

この「〈「のに」文〉の切れ」は、「のに」の接続のしかたが主観的か客観的かという対立論

議 (ALFONSO:1966) (鈴木:1978) (才田:1980) (今尾:1993) にも関連していると考えられる。この論議では、〈「のに」文〉の後件に「～なさい／～しないで下さい／～てはいけない／～ほうがいい」などの主観的要素が後続し得るか否かが、主張対立の根拠の一つになっている。

本稿では、上記の主観的要素が後続した次の(7)(8)のような文が、

(7) 「熱があるのに、きょうはおとなしく寝ていなさい。」

(8) 「疲れているのに、出かけない方がいいよ。」

談話においてよく聞かれることから、これらの文を取り上げ、「〈「のに」文〉の切れ」との関連から言及する。

〈「のに」文〉の二つの用法のうちのA〈完結「のに」文〉については前述したが、もうひとつの用法B〈文末「のに」文〉について、次に述べる。

B. 〈文末「のに」文〉とは、本来「のに」に後続すべき後件が続かず、文末が「のに」で終わる、次のような文である。

(9) 「ええ、でもそのこと先生が怒っていらっしゃいましたよ。」

「えっ、？ 叔母に話したの？ あれほど黙っているって言ったのに」

(盲目のピアニスト)

(10) 「だけどあなた、どうやって育てるんです？」

「どうもこうも、やろうと思えば俺にだってできる」

「夕食はどうするんです？」

「心配しなくてもいい」

「お米のあり場所さえも知らないのに？」

(男三味女三味)

(11) 「あなた、帰ってたの……」

「仕事が一日早く終わったんだッ」

「連絡くれれば良かったのに」

(男三味女三味)

〈文末「のに」文〉には(a)倒置的用法、(b)省略的用法、(c)終助詞的用法の三つがある。

(a) 倒置的用法とは、前件と後件が文章中に表現されているにも関わらず、前件が後置されている上の(9)のような文である。

(b) 省略的用法とは、形式上には後件が見当たらないが他の文脈から復元可能だと考えられる、(10)のような文である。

(c) 終助詞的用法とは形式上に後件が見当たらず、かつ文脈からも後件が復元できない、(11)のような文である。

今回は紙幅の都合上、三用法については詳しく言及できないが、いずれの用法も文末が「のに」で終わることでは共通しており、本稿においては一括して〈文末「のに」文〉として取り扱う。

近来、〈文末「のに」文〉の使用度はかなり高く、特に談話においてその使用を耳にすることが多い。研究書・国語辞典・日本語教科書においても、〈文末「のに」文〉は〈完結「のに」

文)とは別に項を改めて記述されるものが増えてきている。(例、『現代語の助詞・助動詞——用例と実例』、『岩波国語辞典』、『英文中級日本語』)

〈「のに」文〉の切れ)による文や〈文末「のに」文〉が特に談話において顕著であることから、本稿においては、談話における用例を中心として観察する。

2. 〈「のに」文〉の意味構造上の特徴

2.1 〈「のに」文〉は状況依存文である

「「のに」に共通する特徴は、現実の場面を踏まえた条件設定という点であろう。」(森田1988: 57) この指摘が示すように、〈「のに」文〉の第一の特徴は状況に依存して成立する〈状況依存文〉だということにある。すなわち、ある一定の現実状況があって、その状況の上に立って、〈「のに」文〉は発話される。その現実状況とは、次の(12)の前件で示されるような

(12) 「ほかの歯はみんないいのに、この歯だけがやられたのよ」

[ほかの歯はみんないいのだ] という状況のこともあるし、(13)の前件で示されるような、

(13) 「これまでこんなことを考えたことはなかったのに自分の生き方はなんだろうと、ふと考えてしまったんです。」

[これまでこんなことを考えたことはなかったのだ] という過去に経験した事態であることもある。

また(14)の前件で示されるような、

(14) 「私もよ。あなたのことを大切に思ってるのに、怒りっぽくなって、わがままになって。ごめんね」

[あなたのことを大切に思ってるのだ] という話者の想念世界の事柄であることもある。いずれの状況についても、話者がその状況は現存する事実だと見做して、〈「のに」文〉の前件において、その状況に依拠して発話すると示していることでは共通している。〈「のに」文〉が状況依存文であることは、〈完結「のに」文〉に限らず〈文末「のに」文〉についても言えることであり、次の(15)の文において、

(15) A: 「山岡はどこへ行った?」

a. B: 「あれえ。今まであそこで居眠りしてたよ。」

b. B: 「あれえ。今まであそこで居眠りしてたのに。」

a文の話者の主張が「山岡が今まであそこで居眠りしていた」という状態の報告にあるのに対して、b文の場合は、「山岡が今まで居眠りしていた」という状況に依拠した、話者の「どうしたんだろう」「どこへ行ったんだろう」とか「変だ」「おかしい」とか「困ったな」などという疑問や心情の表現にその主張がある。

2.2 〈「のに」文〉は話者の前提とする論理意識の上に成立する

〈「のに」文〉の第二の特徴は、この文が発話される際に、話者が前提とするある概念が存在することである。その概念の論理では、「状況がこうであるなら、当然こうあるはずだ。」と

して、上述の(12)の文例で言えば、〔ほかの歯はみんないいのだから当然他の歯もいいはずだ〕という話者なりの論理となり、その論理に沿って、話者は後件に示される〔この歯だけがやられた〕という現在の事実を対照するのである。前件で示される状況に依拠した「だから当然こうなるはずだ／べきだ」という論理は、(13)の場合では、〔これまでこんなことを考えたことはなかったのだから、当然その後も考えないはずだ〕という話者の論理に導かれながら後件の〔ふと考えてしまったんです。〕という事実と対照する。その時、話者のそれまでの論理の流れは否定されて、〔あの状況にかかわらず結果はこのような事実である〕という意識となり、そこに意外だという含意が生じる意味構造になると考えられる。「のに」が逆接の助詞と言われる所以である。

〈「のに」文〉の前提概念となるこの論理意識は、いずれも話者の経験的事実、社会的通念、常識といったものから形成されたものの集合である。話者は〈「のに」文〉を発話する際に、話者の論理の意識と流れが聞き手と共有できるものであり、聞き手に理解されることを暗黙の前提としてそれを頼りにして発するのである。

2.3 前件と後件には因果関係があり、後件は前件を根拠とする結果事実を表す

〈「のに」文〉の第三の特徴は、第一、第二の特徴と関連することであるが、「前件と後件との間に因果関係がない場合「のに」は使えない」(森田1989:908)ということである。その因果関係は逆接的意味の因果関係であり、「ので」の順接的意味関係と対応する。「のに」は、もともと格助詞の「の」と「に」が複合した語であり、同じく格助詞の「の」と「で」が複合した「ので」と対応する。次の(16)(17)の文では、

(16) 「ごめんね、忙しいのに呼び出して」 (思い出にかわるまで)

(17) 「上司である私の娘が結婚するというのに、お祝いも持って来ないのか。」

(美味しんぼ)

それぞれが〔忙しいので呼び出さない〕、〔上司である私の娘が結婚するというので、お祝いを持って来る〕という順接の意味関係を前提として存在する。「のに」においても「ので」においても、前件と後件は、前件を根拠として後件の結果事態を照合しているという意味関係にある。このような前件と後件の因果関係の結び付きは、「のに」と同じく逆接の接続助詞と言われる「が」「けど」には要求されない。したがって、次のような談話における「が」「けど」は、「のに」に置き換えることはできない。

(18) 「なんだか知らない {が/けど}、とても疲れるんだよ、最近……」 (美味しんぼ)

(19) 「心配はありません {が/けど}、疲労が蓄積していますね。」 (美味しんぼ)

(20) 「見た映画が全部まったく嫌ってことはない {が/けど}、気に入っているものも断片的で」 (君を見上げて)

「のに」に置き換えることができないという理由は、「が・けど」で結ばれる前件と後件の間には因果関係は必要とされないからである。文末に現れる「けど」においても、他の文脈の中に「～けど」の内容と因果関係が求められない次のような場合には、「のに」を用いることは

できない。

- (21) 「私って、小柄な男性を嫌いじゃないな。急にいま、そう思ったんだ が／けど。」
(君を見上げて)

- (22) 「六階のテイルームでお茶でも飲んで話せよ。水口さん、僕はこれから会議なんでご一緒できません が／けど。」
(思い出にかわるまで)

後件が後続しない、いわゆる〈文末「のに」文〉にあっても、文末の「のに」の後には何らかの因果関係に拠る結果事態が求められる。前掲の(a)倒置的用法である例文(9)では、

- (9) 「ええ、でもそのこと先生が怒っていらっしやいましたよ。」
「えっ、？ 叔母に話したの？ あれほど黙っていろって言ったのに」
(盲目のピアニスト)

(9)で後置された前件を先に持ってきた文、「あれほど黙っていろって言ったのに叔母に話したの？」が示すように、結果事態が、前件である「～のに」に先行して示されている。(b)省略的用法の(10)については、

- (10) 「だけどあなた、どうやって育てるんです？」
「どうもこうも、やろうと思えば俺にだってできる」
「夕食はどうするんです？」
「心配しなくてもいい」
「お米のあり場所さえも知らないのに？」 (男三味女三味)

「～のに」に後続するべき結果が、「どうやって育てるんです？」とか「夕食はどうするんです？」などと、話者の疑問となって他の文脈全般から引き出される。いずれの疑問も、「お米のあり場所さえも知らないのに？」の文とは、因果関係に拠って意味の繋がりを持っている。

- (11) 「あなた、帰ってたの……」
「仕事が一日早く終わったんだッ」
「連絡くれれば良かったのに」 (男三味女三味)

(c)終助詞的用法の(11)では、形式の上からは、結果事態に相当する文は、文脈からは見当たらない。しかし、文末の「のに」に後続する結果事態は、「連絡くれれば良かったのに(連絡をくれなかったね。)」とか「(どうして連絡しなかったの?)」などという含意として言外に示唆される。「～のに」に先行する文と、含意の間には因果関係という意味の繋がりが求められる。次の(23)～(25)の文も(11)と同様に、終助詞的用法の〈文末「のに」文〉である。これらの文においては、本来「のに」に後続するはずの後件内容は、様々な含意となって談話の状況に応じて言外に表出する。これらの文状況では、いずれにおいても「けど／が」による置き換えはできず、「のに」によってしか表現できない。

- (23) 「好きなの、高原さん……好きなの……ウソ言ってくれればいいのに……」
(思い出にかわるまで)

- (24) 「電話？ 水口さんから？」
「そ。(略) つい怒ったけど俺が悪いんだから気にするなってサ」

- 「そう……こっちが悪いのに」 (思い出にかわるまで)
- (25) 「道子さんにも教えてあげればいいのに」
 「もちろん教えましたよ。ところが三枝くんは、さとうは好きじゃないと言うんだ」
 (美味しんぼ)

2.4 前件と後件の内容のズレが意外感として言外に表出する

〈「のに」文〉の第四の特徴は、話者の依拠する状況（前件）と結果事実（後件）の間にズレが生じて、そのズレが予想とは異なるとか期待とは違うとかいう意外感として、文に表出することである。その意外感とは、「〔～のに〕は内容上相容れない関係にある前件と後件とを対比的・対照的に結びつけるのに用いられるが、その場合、意外・不満といった気持ちがこめられるところにその特徴がある。」（鈴木1978：253）の説明に代表されるように、「不合理・不満感・不服・うらみ・なじる気持ち・つめよる気持ち」（森田：1989，今尾：1993，国立国語研究所：1951）といった語彙で表現されるものが一般的である。しかしながら、この意外感とは、上述のような不満や不服といったマイナス評価の感情だけではなく、

- (26) 「いやいや大したことをしたわけでもないのに、こんなに盛大に歓送会を開いて頂いて恐縮です。」 (美味しんぼ)
- (27) 「まだ一口しか食べてないのに、なんだか胸の奥までポカポカ温かくなったわ。」 (美味しんぼ)
- (28) 「外国の思い出って不思議ね」歩きながら瑛子がいった。
 「その時はそれほどでもなかったのに、思い出すと、とてもロマンティックなことだったような気がして」 (君を見上げて)

(26)～(28)のように、プラス評価の感情を伴った意外性となって現れることもある。このようなプラス評価の意外感とは〈文末「のに」文〉においても同様に現れ、次の(29)～(31)のような「幸せだ／すばらしい／うれしい」といった感情を表出する場合もある。

- (29) 「すばらしいものをご馳走になって私は幸せ。私はいつも大したものを食べていないのに……。」 (美味しんぼ)
- (30) 「こんな立派な家には住めないと思っていたのに。」
- (31) 「俺はこんなにもてないはずなのに！」

前件と後件の内容のズレが対比的であればあるほど意外感は大きく表出され、

- (32) 「総理大臣なのに貸家に住んでる！」
- (33) 「一才なのに新聞が読めるんだって！」
- (34) 「オスなのに子供を生んだ」

などと(32)～(34)のように「意外だ／びっくりした／信じられない」などの感情が言外に現れる。

3. 「〔のに〕文」の切れ」と〈〔のに〕の後件情意文〉

3.1 「〔のに〕文」の切れ」

〈〔のに〕文〉においては、次の(35)～(37)に見られるように、前件と後件の述語の主語や判断の主体は必ずしも同一ではない。また、前件と後件とが別個の主体の事実状況をつないだり、あるいは前件で事実を述べ、後件で話者の判断や主張や評価を述べたりするというように、前件の従属節と後件の主節の間で文は切れやすい。このような〈〔のに〕文〉の現象を本稿では「〔のに〕文」の切れ」と呼ぶ。

(35) 良夫と登美子が懸命に場を盛り上げようとしているのに、三人の子供達は誰ものってこない。
(思い出にかわるまで)

(36) 「ロシアなんて興味がなかったけど、気に入っちゃった。混とんとした時代なのに人々は変わらず演劇や文化を大切にしている」
(朝日新聞)

(37) 「(そっちは) そんなに感動して泣いているのに、こっちはそれがどういうことなのか見当もつかないなんて」
(君を見上げて)

「〔のに〕文」の切れやすさは、形態的には倒置的用法・省略的用法・終助詞用法に見られる〈文末「のに」文〉の成立を促した一つの理由であると考えられる。昨今の談話における〈文末「のに」文〉の頻用は〈〔のに〕文〉の切れやすさを物語るものである。

3.2 〈〔のに〕の後件情意文〉 その一

「〔のに〕文」の切れやすさは、意味構造の上からは、前件の状況について話者が後件で判断や主張や評価を行う、次のような文を可能にしたと考えられる。前出の(4)～(6)を例示する。

(4) 「私、一生懸命してるのに、ひどいわ！あなたがこんな乱暴で残酷な人だなんて！」
(美味しんぼ)

(5) 「あの人は将来は重役間違いなしって言われていたのに……もう駄目！」
(盲目のピアニスト)

(6) 「もっと長く生きられたのに、残念なことをしました。」
(朝日新聞)

(4)の文は〔(話者である私が) 一生懸命しているのだからあなたがこんな乱暴で残酷な人であるべきではない〕という論理を背景に、「私、一生懸命してるのに、あなたがこんな乱暴で残酷な人である」事態について「ひどい！」と、話者が判断や評価を下している文である。本来の文の構造から言えば、

(4)′ 「私、一生懸命してるのにあなたがこんな乱暴で残酷な人だなんて、ひどい！」となり、「ひどい！」は、前件と後件の結び付いた事態の全体に対して表現されていると考えられる。それが、〈〔のに〕文〉の切れ目に乗じて省略や飛躍を行い、「ひどい！」が「のに」に直接後続したと考えられる。このような、〈〔のに〕文〉の切れ目に話者の判断や評価が直接後続する文を、〈〔のに〕の後件情意文〉と仮称する。〈〔のに〕の後件情意文〉は、倒置的用法の次のような文と同類だと思われる。

(38) 「くそ！社主も局長も、なんて恩知らずだ！俺が会社を救ってやったのに。」
 (美味しんぼ)

(39) 「君もしぶといねえ、早く吐いちゃったら楽になるのに」 (美味しんぼ)

(38), (39)では、「のに」に後続するはずの結果事実は文面には明示されておらず、「なんて恩知らずだ！」「君もしぶといねえ」は、結果事実を含めた事態の全体に対する発言である。

日本語教科書 ISJ-I (1975) の10課にある次の(40)の文、

(40) 「まだ日本語が十分でないのに日本語で講演するなんて出来っこありませんよ。」
 について、才田 (1980:45-46) が、留学生からこの文は「のに」の代わりに「ので」を使うべきではないかとの質問を受けたそうである。それに対して才田は、「この文を「日本語が十分でない」、「講演は出来っこない」という前件と後件から成るといふふうにとらえれば、「ので」を用いるのは妥当であろう。しかし「日本語が十分でない」、「日本語で講演する」という逆接の関係にある二つのことがらを結びつけ、それ全体を「出来っこない」と言うならば、ここには当然、「のに」が使われるべきである。」という説明を行っている。これも、〈「のに」の後件情意文〉の一種として同様に考えられる。(40)の文が、談話において、次の(41)のような発話となる可能性はあるのであり、その場合(41)のBの文は〈「のに」の後件情意文〉と考えてよいであろう。

(41) A: 日本語で講演をお願いしたいんだけど……

B: えっ、どうして？ まだ日本語が十分でないのに出来っこありませんよ。

〈「のに」の後件情意文〉としては以下の(42)～(46)のような文がある。

(42) 「あれだけ尽くしたのに悔しい！」

(43) 「たくさんお金を持っているはずなのにおかしい！」

(44) 「あんなに長い手紙を書いたのに情けない！」

(45) 「忙しいのに悪いね。」

(46) 「せっかく来てくれたのにごめんね。」

また、上記(42)～(46)の文では「悔しい！」「おかしい！」などと表現された話者の気持ちが、表現されずに、文末を「のに」で止めた次のような発話がある。

(47) 「あれだけ尽くしたのに。」

(48) 「たくさんお金を持っているはずなのに。」

(49) 「あんなに長い手紙を書いたのに。」

(50) 「忙しいのに。」

(51) 「せっかく来てくれたのに。」

(47)～(51)の文においては、話者の気持ちは特定されない代わりに、含意として表出されている。表出され得る話者の気持ちは、話者と依拠している状況の関わりかたによってさまざまである。(47)～(51)は〈文末「のに」文〉と呼ばれるものである。

3.3 〈「のに」の後件情意文〉 その二

「のに」に関して、「のに」は客観的対比を示す場合のみに用いられるから、後件に主観的要素を含む「～なさい／～ないで下さい／～てはいけない／～ほうがいい」のような文は用いられない」との見解（永野：1961, Alfonso：1966, 鈴木：1978）がある。このような見解に対して、次のような文がある。

- (52) 「台風が来るのに家にじっとしていなさい。」
「熱があるのにきょうはおとなしく寝ていなさい」
- (53) 「まだ会議中なのに部屋に入らないで下さい。」
「考えごとをしているのに話しかけないで。」
- (54) 「お客様が来ているのにうるさくしてはいけません。」
「畳を変えたばかりなのにここで暴れてはいけない。」
- (55) 「疲れているのに出かけない方がいいです。」
「よく寝ているのに起こさない方がいいよ。」

いずれの場合も、「のに」に後続するべき結果事態を含んで「のに」結合の全体状況と見做し、その全体状況に依拠して、話者が「～なさい／～ないで下さい」などの判断を下していると解釈される。(52)では、例えば「台風が来るのに（聞き手が）出かけようとしている」という状況に依拠して、話者は「家にじっとしていなさい。」との判断を下しているのである。本来、文に示されるはずの結果事態が省略され、話者の判断が「のに」の切れ目に後続していると解されることから、これらの文も〈「のに」の後件情意文〉の一つだと考えられる。これらの文は、もともと「のに」の後ろに「,」を置いて、切れがあることを示すのが話者の論理の自然の流れに沿っていると思われる。談話において近頃頻繁に耳にし、またインタビューなどで見かけられるものである。

才田（1980：44）、仁田（1987：25）において非文法的と見做された命令と禁止の文についても、次のような状況では許容されると思われる。

- (56) 「お金があるのに、*むだ使いするな／ケチケチするな／みんなにおごれよ」
- (57) 「体の調子が悪いのに、*働け！／*怠けるな！ きょうは会社を休め／きょうは会社へ行くな」

(57)で話者が依拠しているのは、（体の調子が悪いのに、会社へ行こうとしている聞き手がいる）状況であり、その「のに」結合の全体状況について、話者は聞き手に「会社を休め」と命令を下すのである。「働け！」が後続し得ないのは、（体の調子が悪いのに、働こうとしている）状況の中で「働け！」との命令は論理的に不整合であるからである。また、（体の調子が悪いのに、怠けている）という状況は現実には考えられず、従って「怠けるな！」という発話も後続しないのである。

〈「のに」文〉において、命令や禁止などの話者の心的態度は、談話の中での聞き手との状況設定の中で、表出が可能になる場合が多いと考えられる。以上のような〈「のに」文〉は、条件づけにおいては順条件づけの形式とはなっているが、単なる順条件づけと異なることは、

以上に説明した通りである。

4. おわりに

〈「のに」文〉の意味構造上の特徴は、〈完結「のに」文〉においても、〈文末「のに」文〉においても同様に認められ、その意味では両者は連続していると考えられる。しかし、両者の間には「〈「のに」文〉の切れ」に拠る〈「のに」の後件情意文〉の存在があり、三つの文がどのような関係にあるかは、今後さらに検討を要する問題である。〈文末「のに」文〉の談話における機能や含意を考えることから、三者の関係をさらに明らかにしたいと思っている。

〈注〉

- 1) 「順条件づけ」は仁田(1987:20)に拠る。仁田は「言い切り節に描かれた出来事・事柄を、順当な展開のものとして差し出している条件づけを、順条件づけと仮称し、期待・予想される方向ではない展開のものとして差し出している条件づけを、逆条件づけ」と仮称している。
- 2) 三上章が、前件と後件の連体接続を根拠に「クセニ、タメニ、ノニ」の割れ目に言及している。(1972:274-75) それに拠ると「ノニ」の前件と後件には「クセニ」のような明確な割れ目はないということになるが、〈「のに」の後件情意文〉は「のに」の切れ目に乗じて起こっている文と考えられる。

参 考 文 献

- 今尾ゆき子(1993)「『ノニ』の機能」名古屋大学『人文科学研究』22
- 奥山 和子(1988)「省略表現の構造と機能」『東北大学日本語教育研究論集』3
- 奥山 和子(1991)「談話に現れる倒置表現の機能——トーク番組の分析——」『東北大学日本語教育研究論集』6
- 国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞——用法と実例——』秀英出版
- 佐藤勢紀子(1994)「中上級日本語教育における中断文『……が/けど』の扱い方」『東北大学留学生センター紀要』2
- 白川 博之(1996)「『ケド』で言い終わる文」広島大学『日本語教育学科紀要』6
- 鈴木 忍(1978)『教師用日本語教育ハンドブック3』国際交流基金
- 才田いずみ(1980)「『のに』と『ても』」アメリカ・カナダ11大学連合日本研究センター紀要3
- 永野 賢(1958)『学校文法概説』朝倉書店
- 西原 鈴子(1985)「逆接的表現における三つのパターン」『日本語教育』56号
- 仁田 義雄(1987)「条件づけとその周辺」『日本語学』9
- 能登 博義(1996)『英文中級日本語』大修館
- 松木正恵・森田良行(1989)『日本語表現文型』アルク
- 三上 章(1972)『現代語法新説』くろしお出版
- 宮地 裕(1984)「倒置考」『日本語学』3巻8
- 森田 良行(1988)『日本語の類意表現』創拓社
- 森田 良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
- Alfonso, Anthony. (1980) Japanese Language Patterns Vol. 2, Tokyo, Sophia University L. L. Center of Applied Linguistics
- アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター. (1975) Integrated Spoken Japanese I vol. 2

用例出典

- 内館 牧子『思い出にかわるまで』 角川文庫
内田 康夫『盲目のピアニスト』 角川文庫
雁屋 哲『美味しんぼ』 15, 17, 37, 40, 44, 48巻 小学館
森 瑶子『男三味女三味』 集英社文庫
山田 太一『君を見上げて』 新潮文庫
山田 太一『丘の上の向日葵』 新潮文庫